

〈書評〉下沢勝井著 『伊那谷の方言歳時記』

矢澤, 美佐紀 / YAZAWA, Misaki

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

39

(開始ページ / Start Page)

92

(終了ページ / End Page)

92

(発行年 / Year)

1988-06-30

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019560>

下沢勝井著

## 『伊那谷の方言歳時記』

矢澤 美佐紀

共通語と方言のごちゃ混ぜになった独特なことばは、方言が生きている地域の数だけ存在している。もしかしたら、それは東京と故郷のはざままで日常を送る、地方出身者らの詩なのかもしれない。

本書の地の文から、私はこんな感慨を抱かされた。伊那谷の方言をかりれば、へぬくとくく、明るい温暖な陽のにおいが、簡潔で切れ味のよい説明文の中に、へいあんばいVで漂っている。そして、行間には著者の次のような心情が滲み出ている。(下沢氏は信州伊那谷の中央に位置する松川町旧生田村生東の出身である。)

「ことばの研究者でもない私が、郷里の雑誌へこうした連載を思い立ったのは、そうし

た生活へのなつかしさから郷里のことばを通して郷里の人たちと話し合いたかったからである。―あとがき―

へみやましいVへずくなしVへくねっばいVへ気つけえな人V等は共同体内の人間を評価する時のものであり、この種のことばは実に豊富である。また、共通語では、「今日」の一言で片付けられる挨拶も、へ丹精をおせてVへいおしめりだったなムVへお涼しくなりましたV等と自由自在に変化する。

下沢氏は、自由な発想でそれらの語源にせまろうとしている。他地域との関連にはじまり、時には世界にまで広がっていく。また、「万葉集」等の古典作品と伊那谷のつながりを見い出す時、氏の筆は一層冴えるようだ。ことばの中には、時代の流れとともに、風化しつつあるもの、変容しつつあるものがあり、家庭生活形体の変化から失なわれたものも少なくない。へゆるりゆるる話さまいVという時のゆるり(囲炉裏)そのものが消失したことへの淋しさを隠さない氏の語り口調に、かつて氏を取り囲んでいた生活と人々への深い慈しみと、少年時代への甘やかな愛惜の情を感じずにはいられない。

方言を通して、故郷の暮らしぶりを語ろうというよりも、むしろ著者にとっては方言が土地の生活そのものであり、風俗、文化なのであり、人間の気質なのだと言わんとしていることに気づく。

「―前略― ことばを厳密に規定しておかなければ、われわれ社会生活の通じ合いそのものがゆるいでしまう。その上ことばも生きものだからいくらでも動いていく。その動きの相を明らかにすることが、今いるわれわれ自身の歴史と生活の位置を発見することにもつながってくる」

方言にこだわるのが、自己の存在にこだわることでもある。伊那谷を語ることが、日本社会全体を見つめ直す手がかりともなっていく。

地方画一化の風潮にたいする反撥と、否定でも賛美でもない郷土愛とがここにはある。下沢氏は、実に気持ちよく故郷を誇っている。

(郷土出版社一、五〇〇円)

(一九八八年度卒業)